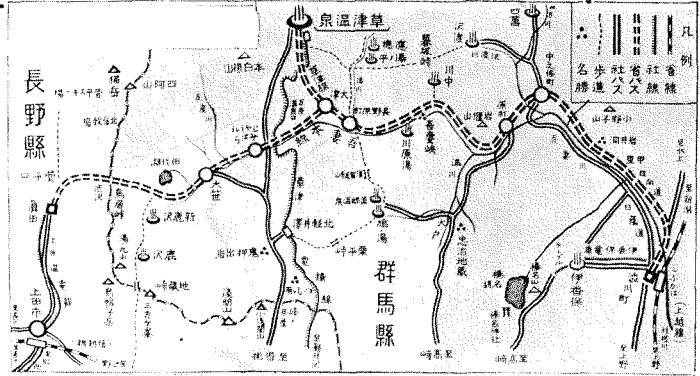


## 群馬縣下の 工事を探る



(1) 視察コースの一部。

5月8日と9日に催された土木學會の春のエクスカーションは、群馬縣下の主要なる工事を訪ね、傍ら吾妻溪谷の清流に沿ひ、草津温泉の泊浴、浅間山麓から軽井澤、碓氷峠の新線を探り、高崎市外の大観音像に参拜するまで行程200軒のドライブは、好天氣に恵まれ至る處各當局者の歡待裡に非常な盛況であつた。参加者には會長大河戸宗治博士を始め、副會長新井榮吉博士、前會長那波光雄博士、前副會長眞島健三郎博士等も見え、北海道から歸京の途中参加した伊藤長右衛門氏は唯一人の和服姿で異彩を放ち、國澤新兵衛博士も元氣で参加されたのは珍しい事であつた。群馬縣からは土木課長平川保一氏が二日間同行の勞をとり、群馬水電の技師石井林次郎氏や、三陸水電取締役技師の塚塚安三氏や、關東水力電氣の技師増田清三郎氏な

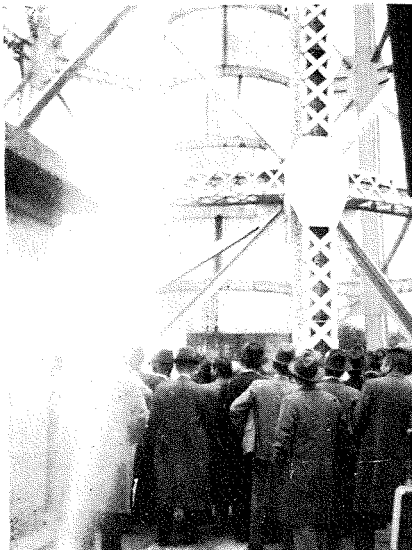
ども参加して一行の爲に便宜を圖り、其他官民各方面からの老大家や若手の元氣な土木技術家ばかりで和氣に満ちた意義ある愉快な見學旅行をする事が出来た。

次に見學視察の機会を得られなかつた讀者への報告として當日の状況を簡單に記す事にする。

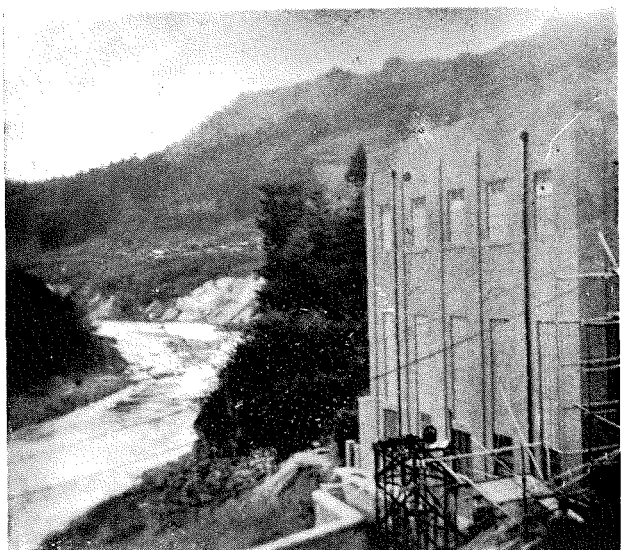
× × × ×

上野驛から新潟行の準急行列車に乗ると、2時間半で澁川驛に着く、澁川町は伊香保温泉を控へて乗降客も相當に賑ふてゐる。土木學會の一行は驛前の受附で見學に關する印刷物などを受取り、縣當局其他の案内により自動車20臺を連れて利根川沿岸の關東水力電氣會社の佐久發電所を見學に向つた。佐久發電所は利根川を利用せる最大の發電所で、設計施

(2) 佐久發電所サージタンク見學。



(3) 工事中原町發電所。



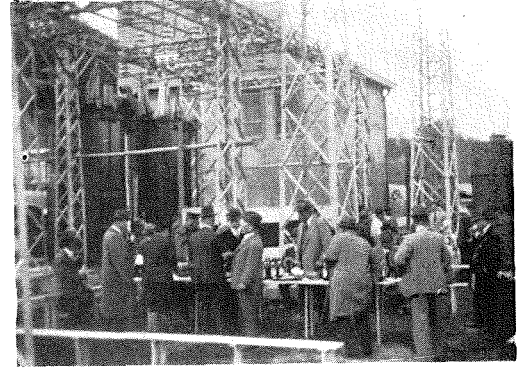
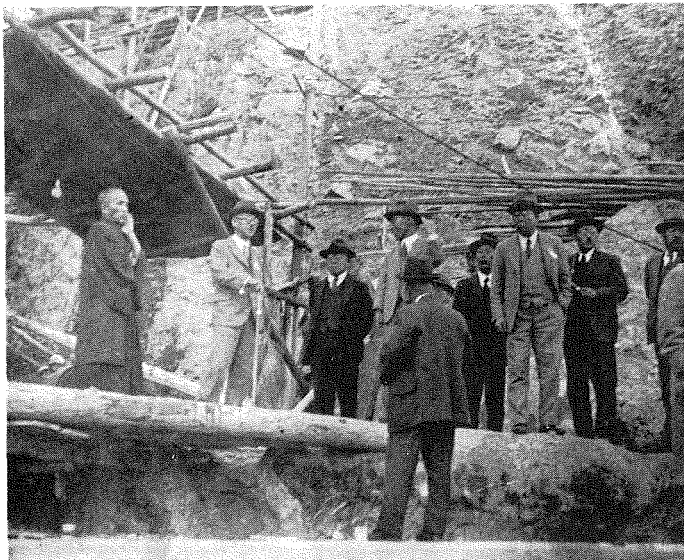


(4) 工事中原町発電所水圧管。

工とも近代工事の代表的のものである。澁川駅より自動車30分にて着、此所で關水の技師下浦眞清氏等の案内で水壓鐵管路と、有名な高さ200尺のディフェレンシャル・サージタンクを視察して俱樂部に小憩後直に澁川町に引返した。尙關東水力電氣會社では吾妻川より引水して當發電所を増力する工事中であるが、之は稿を更めて紹介し度いと思ふ。

澁川町にて後班と合し、再び自動車を連れて次の見學個所たる群馬水電株式會社の原町發電所工事場に向つた。道は利根川本流と分れて吾妻川沿岸を登つて行く、川の右岸に東京電燈株式會社の金井發電

(6) 原町發電所にて・左より伊藤長右衛門、岡崎正伸、國澤新兵衛、石井林次郎、後向きが運塚安三、遠藤蘆吉、中野深の諸氏。



(5) 原町發電所に休憩中の一行。

所及び其の取入口の既設構造物などが見える。此附近に群馬縣の名勝の一たる岩井洞がある。奇岩怪石と云ふ程でもないが、岩石と樹木との立體的な組合せが面白い。

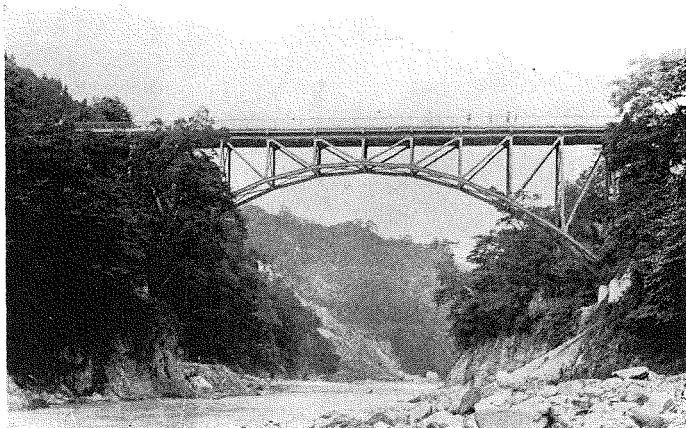
原町發電所は中之條町の直ぐ上流左岸にあつて縣道に接し交通は便利な處である。發電所の建物は全部竣工し、内部には1萬1千キロの發電機2臺が殆んど据付完了に近づいてゐる。縣道を隔てゝ水壓鐵管2條も全部敷設されてゐる。鐵管路から上の高地には調整池や水路隧道等が工事中である。總ての工事は順調に進みつゝあるので8月頃には竣工の豫定

である。原町發電所建設事務所長は群馬水電株式會社技師石井林次郎氏で、氏は既に群馬の發電所數ヶ所を建設した人である。従つて此の原町發電所の設計と施工には参考とすべきものが多いのであるが、それは他日紹介の機會を得度いと思ふ。

原町發電所工事の見學を終つたのは午後5時すぎであつた。一行は新緑の吾妻川沿岸を上へ上へと登つて行く、道路が割合に良いので自動車は50軒位もスピードを出してゐる、30臺からの自動車が100米位の間隔で馳走してゐるから先頭自動車以外は常に砂煙りの中を突進してゐる事になり、相當に異觀を呈した事である。

此邊の村落は落付のある郷土的

な建物が多いので、ハイキング・コースとしても最も適した處である。吾妻川沿岸の中で川原湯温泉の在る附近は關東邪馬溪と稱せらるゝ處で、此所は九州の邪馬溪よりも溪谷の美が雄大である。頼山陽先生をして此地を踏ましめてゐたならば恐らく絶讃の景勝として天下に知られた事であらう。川原湯温泉は溪谷の絶壁に數戸の旅館があるのみで、他に人家はないから實に静かな仙境であらうと思はれる。夏季には東京から學生が來て試験勉強に没頭するものが多いと



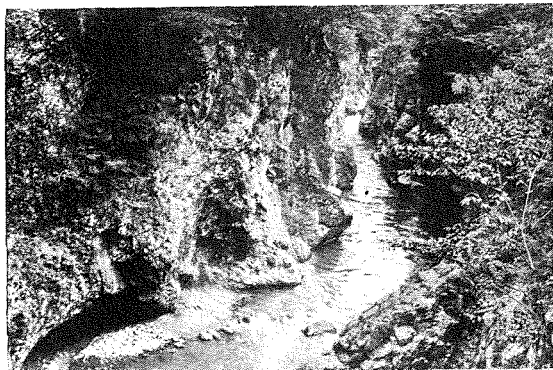
(7) 吾妻峽の一景。

の事である。此溪谷に入る前に群馬水電株式會社の松谷發電所がある。最大出力2萬3千キロ、昭和4年の竣工である。此外に吾妻川の支流須川に於て出力1萬2千5百キロの川中發電所がある、以上の3發電所が群電の1系統の下に計畫されたものである。

長野原町に近くなると縣道を横斷する谷川の橋梁など工事中の個處が多い、之は昭和10年の風水害の復舊工事として縣に於て施工中のものであるが、其等の橋梁は何れも鐵筋コンクリートの構造でスマートなものである。此の山間部落に於て此等の小橋梁が斯くも文化的な設計施工になつてゐる事は、觀光コースとして亦産業交通の點からも頗る意義ある事である。

長野原町を過ぎて直に東信電氣株式會社の大津發電所がある、出力2千キロ、堰堤式自動發電所(工

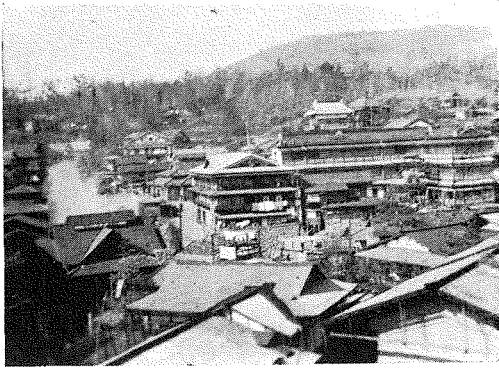
(8) 吾妻峽。



事畫報昭和5年10月號に詳報あり)として見學したい處であるが、行を急いで吾妻川を右に草津温泉へと馳走した。夕暗の中を草津町に近くと道の兩側には白樺の樹林の白さが特に目立つて見える。午後7時海拔1170米の草津温泉町に着いた。冷々とした氣温は一種清新の氣を感じる位である。町の中央なる湯畑の廣場にて各旅宿の出迎人に案内されて、一行は數ヶ所の温泉宿に分宿した。

我々は日新館の別室2號を割當られたが、名は日新でも相當古い建築で、浴槽等も舊式なものである。然し之が草津温泉の特色らしい、即ち其純朴な田舎らしい温泉氣分が亦一種の落付いた氣分を與へるのである。温泉は無色で非常に酸が強い、我々は一浴して直に懇親會場たる益成家と云ふ料亭に出掛けた。此處は新築の大廣間で、餘興場の舞臺まで出來てゐる。席が定まると群馬縣土木課長平川保一氏は

(9) 草津温泉町。





(10) 田代貯水池にて、中央が群馬縣土木課長平川保一氏。

立つて縣及び各會社及び草津町を代表して土木學會視察團歓迎の辭を述べ、併せて草津温泉の特異性を紹介し、次いで大河戸宗治博士立つて土木學會を代表して、縣及び各會社其他より寄せられた歡待と好意とに對して謝意を表し、會員一同拍手を以て之に和した。宴會は草津藝者數十名のとりなして10時すぎまで賑つたが、其間に草津音頭や湯もみ講などの踊りの餘興があつた。草津町寄贈の白樺細工の郷土人形や、湯の精、繪かがきなど持つて各自の宿に引あげたのは11時頃で、温泉町の夜は明るい、高山地帯の夜は寒い位である。

第2日の9日は午前6時半から湯もみを見物に行つた。之は草津温泉の如き熱湯に入る際の豫備運動とも見らるべきもので、時間湯と稱する町營の公設



(11) 淺間山麓の一行。

浴場に限つて行はれてゐる。浴槽の縁に8人程の浴客が腰巻一つになつて並び、手に手に6尺位の板を持つて音頭に合せながら熱湯を搔き廻すのである。相當の時機を見計ひ音頭取りの長老の號令一下、浴槽に飛び込むのである。之は昔からの草津温泉獨特の湯治方法と稱されるもので、如何なる難病と雖も根治すると信ぜられたものである。草津温泉の効能は既に數十年前からベルツ博士等により推稱されてゐる點に見ても確實なものであるが、我々が一泊した丈でも此の高山帯の日光と空氣と温泉と而して純朴なる郷土氣分とは無限の効能があると思はれた。

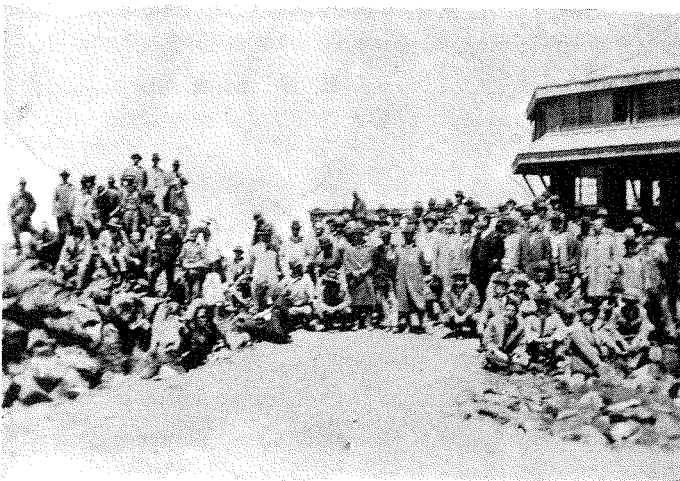
町の一端に西ノ河原と稱する廣場がある、此邊は一帯に温泉が湧出してゐるので、湯の精と稱する硫黄を沈澱させて採收してゐる。附近の路傍には石楠

其他の高山植物も多い、櫻や桃なども恰度満開で散歩地らしい氣分である。直ぐ近くには冬期スキー場としてのスロープなどもある。

宿に戻つて一浴して朝飯をすまし、9時半愈々草津温泉出發である。一行は土産物など手に手に湯畑と稱する町の廣場に集まり、昨夜の儘の自動車に乗込み、町民多數に送られ乍ら草津町を後に山を下つた。

今日の見學個所は東信電氣株式會社の田代貯水池である。草津町より1時間にて着、田代貯水池は延長540間の土堰堤を以て田代盆地の濕潤地を利用したもので、鐵

(12) 岩窟ホール前の一行。



筋コンクリートの止水壁を有し、大正15年竣工した漏水絶無と稱せらるゝ我國土堰堤の代表的なものである（工事の詳細は工事畫報昭和4年8月號參照）。本貯水池は吾妻川本支流の過剰水を導入蓄積するもので、冬期の湧水時に際し、必要に応じて下流の田代發電所及び他の發電所に利用せらるゝものである。本貯池及發電所の建設當時の擔當土木課長たりし運塚安三氏の説明を聞きつゝ湖畔に少憩し、今度は自動車にて吾妻川沿岸を下り、道を右に折れて淺間山に向つた。淺間山の頂上は行手に近く薄雲の様な煙を細くゆるやかに噴いてゐる。天明3年の大爆發には附近村落何ヶ村を全滅して、砂や岩は吾妻川迄押出したとの事である。自動車の進む道の兩側は雑木の若木と、淺間山から噴出した巨岩と碎石の平原である。正午近くに淺間山中の奇勝鬼の押出しと稱する熔岩の推積せる岩窟ホールに着いた。岩窟ホールは木造八角建の見晴家屋で、箱根土地株式會社が輕井澤から日々通勤で營業せる遊覽地である。此ホールにて熔岩の平原と淺間の雄姿を眺め乍ら中食を執り、小憩後コースを更へて帝大の地震觀測所と淺間養狐場を見學した。地震觀測所は本誌にも曾て紹介したが、鐵筋コンクリートの近代的建物で、屋内には淺間山噴火の記録や記念物寫眞や模型等陳列されてゐる。銀狐養殖場では生後40日と云ふ黒毛の小狐を見たが、小熊の様でもあり、小犬の様でもあり、可愛い態度で運動をしてゐる。それが3年もたつと1頭千圓以上の毛皮を残すのだそうである。附近には養狐場が尙2ヶ所もあつた、銀狐流行時代を物語るものである。

附近一帯は雑木や白樺の林が續いてゐる。輕井澤に近くなると廣々とした林の中に所謂文化住宅が點點と見えて来る。音樂の教授とか、洋畫の展覽會などのポスターも見える。此の山中で謠曲の教授所まである。輕井澤の別荘地帯を通過して、信越線の沓掛驛前になると、道は愈々鐵道線路に沿ふて碓氷國道をドライブするのである。碓氷國道の工事寫眞及工事は曾て本誌に紹介した處であるが、内務省東京土木出張所の工事として著名なものである。碓氷峠には吾妻川の様な溪谷の雄大さはないが、滿山の新緑は今が見頃である。40ヶ所もある急カーブを右に左に峠を下る、鋪裝道の急傾斜であるからスピードを出すと手に汗する様な處もあるが、運轉手は馴れた

ものである。同車中の3人も午後2時頃になると疲勞も出て居眠りを始める。碓氷峠を下つて道を松井田後閉にとり九十九川の災害復舊工事を、走り乍らの自動車から見學した。此の工事は殆んど堤防工事で一寸と視た處では平凡な工事であつたが、此處で先年の群馬縣の風水害が何んなものであつたかを回顧して見よう。

それは昭和10年8月からの豪雨續きの處へ、9月24日と25日の2日續の豪雨となり、烏川流域の群馬郡倉田村の如きは降雨量400耗以上に達し、其他300耗以上の處多く、縣下至る處に山腹崩壊し、山津浪を生じ、道路橋梁人家を押し流し、堤防を破壊して田畑を埋没した處多く、之が爲の被害は死者254人、傷者117人、其他の損害4千4百萬圓に達したのである。特に此の碓氷郡は被害最も多かつた處である。當時群馬縣は應急費として30萬圓を以て、假道、假橋、河川防護等をなし、兎に角5日間に交通を回復したのである。而して急速に1千萬圓に達する土木事業の復舊計畫を立て大々縣會及び政府の承認の下に昭和11年1月から工事に着手し、工事執行の組織方法、監督等の部署整然として今や工事は順調に進みつゝある。此等の工事は何れ稿を改めて紹介し度いと思ふ。

我等の自動車は九十九川の河川復舊工事を見乍ら安中町をすぎ愈々高崎市に入つた。市内を迂回して郊外丘上に出で、最近有名な白衣觀音の像に參詣した。像は高120尺、白色コンクリートの立姿で、此種の佛像としては世界第一のものである。構造は小模型を水平の層に切斷し、此一層毎を縦横にサイコロ型に切斷して、其外側の形に應ずるコンクリートブロックを造り、順次に之を鐵筋にて積み重ねたものである。然も仕上りは頗る優秀なもので慈悲の溫容は鎌倉の大佛にも比すべきものである。

斯くて、高崎驛に自動車を降り此行を終つたのは午後4時半頃であつた。高崎驛にて平川縣土木課長其他に2日間の好意を謝しつゝ別を告げ、一同上野行急行増結車に乗車出發した。車内にて關東水力電氣會社の好意による辨當及茶菓を分與され、談笑の間に夕餐をなしつゝ2日間の疲勞も忘れて東京に戻つた。（一記者）